

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉碎！

# 軍事大国化・侵略への道 反動鈴木内閣

14日ソウルの軍法会議裁判で憲兵にはさまれ被告席にすわる金大中氏（前列右から2人目）1人おいて左が文益煥牧師（UPI）



## 日刊 勤労千葉

80.8.19

No. 511

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）  
（鉄電）三五八・九（公衆）〇三三（22）七二〇七

### 全斗煥と日本政府による金大中氏への死刑攻惠を断じて許すな！

八月十四日、あの血の弾圧者全斗煥は遂に金大中氏らに対する死刑抹殺の意図もあらわに軍事裁判を強行開始した。ありとあらゆるデッチ上げ「罪名」をこじつけ、金大中氏をはじめとする政治家・教授・宗教学者・詩人など二四名の人士の首を、数千の光州人民を無差別に虐殺したその血ぬられた手で締め殺そうというのだ。しかも全斗煥は軍事裁判開始に先立ち、政治犯の擁護に熱心な弁護士二〇名をすでに戒厳司令部に連行したまま、金大中氏らは自らの立場を理解し擁護してくれる十分な弁護人選任の権利さえ剥奪されていると伝えられている。

全ての組合員の皆さん！どうしてこんな蛮行が許せるだろうか！

その上、日本政府は、重大問題となったデッチ上げ起訴状文に対してさえ「政治決着には抵触せず、問題なし」として全斗煥全面支持を即日表明するという反動的本性をむき出しにしたのである。

事態は急を告げている。今こそ全人民的な全斗煥・反動鈴木内閣弾劾、金大中氏ら救出の大運動をまき起こしていかなければならない。

### 急転回とげる反動攻勢

しかも、その上、翌八月十五日「終戦」（敗戦）記念日に各界の批判を押し切り、鈴木首相を先頭に閣議申し合わせをもって全閣僚が靖国神社に参拝し、「国のために散った英霊をたたえてどこが悪い」と聞き直り、逆に靖国神社法案の立法化をぶち上げたのである。

時を同じくして「わざわざ八月十五日という日を選んで」、陸上自衛隊が「北海道にソ連軍が侵攻してきた」という想定の一あかつき大演習」と称する二週間にもわたる図上演習「有事のための指揮所演習を開始し、わざわざ報道陣を招いてその作戦ぶりを公開するという異例の措置をとった。

続く八月十六日、新聞は「崔圭夏大統領辞任、全斗煥近く大統領就任か」の見出しと共に、日米両政府ともこの動向を支持する旨の見解を報道した。

この急転回する今日の事態は一体何か？ 今や、時代は容易ならざる事態にまで直面していると言わざるを得ない。

そもそも、ダブル選挙という強引なやり方で「数の圧勝」をもぎり取った田中（大平）鈴木

体制が発足以来やってきた事、そしてこれから力にまかせて強行しようとしている事とは、何であるのか。

それは第一に軍事大国化の大攻撃であり、第二に全斗煥との全面癒着、第三にすさまじい生活破壊と暗黒反動政治、そして第四にその最大の攻撃軸として三里塚二期攻撃への凶暴な突進である。

### 反動鈴木内閣こそ、軍事大国化促進内閣！

第一に、懸案になっていた事全てを一挙にはき出すが如く、次々と超反動的な軍事大国化攻撃をかけてきている事である。



始まった陸上自衛隊の図上演習＝15日午前9時40分、東京・六本木の防衛庁

例えば自衛隊装備計画「中期業務見積り」をくり上げ達成し来年度から防衛予算はワクを外した特別扱いとする確認（7/23）をはじめ、軍事・外交・産業の三分野の一体化をはかるための「総合安保会議」設置の意向表明（7/21）、そして7/27には外務省が「80年代安保・外交政策」の方向性と称して「軍事力を背景とする外交」「自衛隊増強および海外派兵」の必要性・有効性を強調し、そのために「日米共同演習の積極的推進」をはじめ公式報告書の中に堂々と記載発表したのである。更に、反ソ宣伝と天皇制賛美をテコに「靖国法案」「国防教育義務化構想」等々、一挙になだれこもっている。（以下つづく）

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！